



Title	<紹介>尾崎千佳ほか編『西山宗因自筆資料集』
Author(s)	辻村, 尚子
Citation	語文. 2008, 90, p. 54-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69107
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

尾崎千佳ほか編『西山宗因自筆資料集』

辻村 尚子

連歌師としてまた俳諧師として、多才な活躍ぶりをみせた西山宗因。平成十七年の宗因生誕四百年を期して、『西山宗因全集』が編纂され、また展覧会「宗因から芭蕉へ」が開催されるなど、宗因の業績を顕彰する事業が進められた。その展覧会と連携して刊行された本書は、熊本文化研究叢書の一つとして、宗因の故郷熊本や九州にゆかりのある、以下の資料を収録する。

肥後道記、歳旦和歌連歌懐紙、大神宮法楽 賦初何連歌百韻、美作道日記・奥州塩竈記・有芳庵記、小倉千句 第五、旅の発句色紙、北島江庵宛 宗因書簡

全ての資料に影印、翻刻（尾崎千佳氏）、ならびに解題（尾崎・島津亮二氏）が備わる。連歌・俳諧のみならず、和歌や紀行、書簡をも収録する本書によって、宗因の活動のさまざまな面をうかがうことができる。また、現存最古の宗因自筆資料である「肥後道記」以下、各資料は染筆時期（含推定）の順に配されている。本書一冊でもって、宗因の青年期から晩年に及ぶ筆跡の推移を通覧することが可能であるように編集された本書は、今後、宗因の筆跡研究の根幹資料として有用であろう。

収録資料のうち、熊本にある八代市立博物館に蔵される「歳旦

和歌連歌懐紙」「大神宮法楽 賦初何連歌百韻」「小倉千句 第五」は今回の展覧会の開催にあたって確認された新出資料である。下絵、料紙の美しさをも感じ取れるようにと配慮された影印によって、宗因研究者でなくとも、宗因の息づかいを感じつつ文字を追う、またこれも新出資料である「北島江庵宛 宗因書簡」にみられる、書簡における筆遣いとの相違を比較することによって宗因の多様な世界の一端を味わうことができる。

「あながき」によれば、本書の刊行は、『宗因全集』ならびに展覧会にも携わった尾崎氏の尽力なくしては成し得なかったという緻密な考証と資料の博搜によって精力的に宗因伝記研究を積み重ねてこられた氏による解題は、資料の性格や位置付けを的確に指摘するのみならず、研究史上における課題も提示されている。『宗因全集』、展覧会図録『宗因から芭蕉へ』（共に八木書店刊）とあわせて、近世連俳史研究を志すものにとって必携の書であるといえよう。なお、氏の『明石山庄記』の位相（『国文学解釈と教材の研究』平成十九年四月）は、島津忠夫氏（『美作道の吟行』）「解釈と鑑賞」平成十八年八月）における、複数の自筆資料が伝存することの多い宗因の紀行文における文辞の異同を、宗因の推敲過程ではなく、書き与える人への配慮とする視点を『明石山庄記』においても具体的に検証し、本書で氏が課題の一つとする「文学作品としての読解」にも取り組む。今後の氏の、ひいては宗因研究の方向を指し示すものであろう。（熊本県立大学日本語日本文学研究室、二〇〇七年三月、一六四頁）財団法人柿衛文庫―